

## 天智天皇と鏡王女の贈答歌をめぐって

竹嶋麻衣

## 一．はじめに

萬葉集卷二相聞の部の巻頭を飾る磐姫皇后歌群（②八五〇八八）は、一般に後代の仮託と見られているため、萬葉相聞歌の実質的な初発は、「近江大津宮御宇天皇代」（天智天皇代）に収録された次の二首である。

天皇賜<sub>レ</sub>鏡王女<sub>二</sub>御歌一首

妹が家も継ぎて見ましをやまとなる大嶋の嶺に家も有らましを（②九一）

一云 妹があたり継ぎても見むに 一云 家居らましを

鏡王女奉<sub>レ</sub>和御歌一首

秋山の樹の下隠り逝く水の吾こそまさめおもほすよりは（②九二）

ここで歌を詠み交わしている天智天皇と鏡王女が夫婦、あるいは恋人であったという記載は史書にはない。鏡王女は次の九三・九四番歌では藤原（中臣）鎌足に求婚されており、彼の妻であったようである。鏡王女の出自に関しては諸説あり（注）、いまだ決着を見ないが、天智天皇と近しい皇族であったことはほぼ間違いない。

二首は天智天皇代に収録されているため、これが史実の時間的経過に基づく配列であるとするれば、近江遷都の年（天智

六年・六六七)以降の作となるが、近江大津宮から大和の山は見えない。「大嶋の嶺」は所在未詳<sup>(注2)</sup>だが、「やまとなる大嶋の嶺」である以上は、大和の地名であることは間違いない。したがってこの歌は、天智天皇がまだ皇太子であった時分、すなわち孝徳天皇の難波長柄豊碓宮の時代に詠まれたものであると考えられる。

橋本四郎(一九七七)は、この二首を卷二の他の贈答歌七組と比較し、「贈答歌の外面的標識であるはずの用語の共有がない」ことを指摘している。たとえば二首に続く藤原鎌足と鏡王女の贈答では「玉匣」が共有される言葉である。橋本氏は、「相手の働きかけを機縁として独自の世界を繰り広げるのが報歌である限り、報歌には贈歌への志向がなければならぬ。これらの七組の場合にはその志向性が用語面に顕在しているのである」と述べ、天智天皇と鏡王女の贈答歌を特異なものとして捉えている。

その上で橋本氏は「これが贈答歌として編み込まれ、享受されたのは、両歌がより内面的に贈答の響き合いを保ち、それが編纂時の享受者たちにも了解されていたゆえでなければならない」とするが、筆者はこれを支持する。編者が贈答として収録した以上は、二首には贈答と判断しうる何かがあったはずである。そしてそれは、歌の表現の中から見いだされるべきものと考えられる。

よって以下、本稿では、二首の「表現性」に着目し、言葉の面から贈答としてのありようを探っていききたい。

## 二、「妹が家」の解釈

天智天皇の贈歌、

妹が家も継ぎて見ましをやまとなる大嶋の嶺に家も有らましを(②九一)

を解釈する上で、従来最も問題視されてきたのは、結句の「家」、すなわち大和の大嶋の嶺にある「家」を、作者（天皇の家と妹（鏡女王）の家、どちらで捉えるべきか、ということである。この歌には異伝が存在するが、それは結句が「家居らましを」なので天皇の家と解して問題ない。だが、この異伝を踏まえて本文歌も「天皇の家」と判断するのは早計である。

山田孝雄（一九四二）は、

この歌の結構を見るに、二段落よりなりて上の「妹之家毛継而見麻思乎」と下の「山跡有大島嶺尔家母有猿尾」とは意を少しくかへたれど、畢竟同意の繰返なることは明かなり。これを繰返と見ずしては上下の打合都合せず。

（傍線筆者）

と述べ、「同意の繰返」を理由として結句を「妹の家」と判断している。この立場をとるのは、澤瀉久孝（一九四一）や青木周平（二〇〇〇・初出一九八七）、鉄野昌弘（一九九五）などである。

一方、土橋寛（一九六〇）は、

上二句の意味と下二句の意味が同じ意味を表すという点から言えば、「家」は作者の家であつても相手の家であつても差支えなく、第五句が第一句の繰返してない以上、「妹が家」でなければならぬということとは言えない。∴（中略）∴私はこの歌の発想のし方に、前にも述べた春山入りの行事における国見的望郷歌、ないし国見的恋歌のそれと類似のものがあるように思う。

として、結句を「天皇の家」と捉えている。この見解は、寺川真知夫（一九六九）や村田右富実（一九九八）らが支持する。ここで示された「国見的望郷歌、ないし国見的恋歌」（以下「国見的な歌」とする）とは、土橋寛（一九五八）の定義によると「山の上から自分の村や思う人の住む家辺を望む望郷歌、あるいは望郷的恋歌」のことであり、国見歌<sup>〔注3〕</sup>の

流れを汲むものである。土橋氏は「妹があたりへ家のあたりへ」という語を国見の歌の慣用句とし、次のような例を挙げている。

・つぎねふや山代川を宮上り我が上れば、青土よし奈良を過ぎ、小楯大和を過ぎ、我が見が欲し国は、葛城高宮、我家のあたり。(記五八・紀五四、磐姫皇后)

・殖生坂我が立ち見れば、陽炎の燎ゆる家群、妻が家のあたり。(記七六、履中天皇)

たしかに記紀にはそのような「国見の歌」が存在する。また、萬葉集の「妹があたりへ君があたりへ家のあたり」の用例中にも同様のものが見受けられる。

山などの高所からの詠であること、故郷あるいは恋人の住む家の辺りを望んでいること、という二点を判断基準とする、次のような歌が国見の歌の範疇に入る。まず「妹があたりへ君があたり」の例。

和銅三年庚戌春二月從<sub>二</sub>藤原宮<sub>一</sub>遷<sub>二</sub>于寧樂宮<sub>一</sub>時御輿停<sub>二</sub>長屋原<sub>一</sub>廻<sub>二</sub>望古郷<sub>一</sub>作歌 一書云太上天皇御製

(1) 飛ぶ鳥の明日香の里を置いていなば君があたりは見えずかもあらむ (①七八)

和銅五年壬子夏四月遣<sub>二</sub>長田王于伊勢斎宮<sub>一</sub>時山邊御井作歌 (三首目)

(2) 海の底おきつ白浪立田山いつか越えなむ妹があたり見む (①八三)

右二首今案不<sub>レ</sub>似<sub>二</sub>御井所作<sub>一</sub> 若疑當時誦<sub>レ</sub>之古歌歟

(3) 青駒が足搔きを速み雲居にそ妹があたりを過ぎて来にける (②一三六・柿本人麻呂)

(4) 秋山に落つる黄葉しましくはな散りまがひそ妹があたり見む (②一三七・柿本人麻呂)

- (5) 妹があたり吾が袖振らむ木間より出て来る月に雲な棚引き (⑦一〇八五・作者不明)  
 (6) 妹があたり遠くも見ればあやしくも吾はそ戀ふるあふよしをなみ (⑪二四〇二・作者不明)  
 (7) 天地のよりあひの極み玉緒の絶えじとおもふ妹があたり見つ (⑪二七八七・作者不明)

(1)は太上天皇御製と一書にあり、これは元明上皇を指す。その場合「君があたり」とは亡き草壁皇子の墓がある真弓の岡周辺と目される。この歌のみ他の例と異なり「君があたり」となっているのだが、詠み手の性別が異なるだけで、発想自体には違いがない。(2)は題詞を尊重すれば山辺の御井での作となり、高所とは言えないが、歌のみで判断すれば国見のと言いうる。(3)には「見る」の語がないものの、同じ石見相聞歌の(4)からの連想で「妹があたり」を見ていることは明白である。石見相聞歌の中には、「石見のや高角山の木の間より我が振る袖を妹見つらむか」(②一三三二)など、山、すなわち高所から妹の方角を見て手を振っているという内容のものがあるが、(5)はこれを踏まえたものとされているので、国見のな歌と認めてよいだろう。(7)については伊藤博(一九九七)が「高い山の上からはるかに眺めているのであろう。遠い旅から久方ぶりに帰って来て、まずはいとしい人の住む村落を故郷の光景として見納めた時の感慨とても考えるべきか。」と述べているため、これを採れば国見のな歌であると言える。これら七例に、九一番歌の異伝が加わるため、集中に全部で十九例あるへ妹があたりへ君があたりへのおよそ半数近く一八例が国見のな歌となる。

しかし残りは全て国見のな歌とは認められないものばかりである。たとえば「妹があたりしげきかりがね夕霧に来鳴きも過ぎぬすべなきまでに」(⑨一七〇二・人麻呂歌集歌)は、弓削皇子に献じた雑歌三首の中の二首目であり、前後の歌も含めて主眼は雁の鳴き声にある。高所での詠ではなく、望郷の念や恋人への思いを詠んだものでもない。「河上に洗ふ若菜の流れ来て妹があたりの瀬にこそよらめ」(⑪二八三八・作者不明)の場合は、自身が若菜のように流れていって、

川下にある妹の家の近くの川瀬に流れ着きたいといった内容の歌であり、たしかに高所（上流）から下の方に目線が転じているが、それを「国見」（為政者が高所から自分の統治する土地を眺めやる）に準ずる行為と見ることはできないだろう。

〈家のあたり〉の場合は、更に国見的な歌の割合が少ない。本文歌の表現〈妹が家〉と異伝の〈妹があたり〉の中間に位置すると考えられる〈家のあたり〉の用例は集中に全部で八例（異伝を含めると十一例）あるが、その中で国見的な歌と認められるのは、「白たへの袖はまゆひぬ我妹子が家のあたりを止まず振りしに」（⑩二六〇九・作者不明）のみである。この歌にも「見る」の語はないが、家の方角を向いて袖を振る行為は、国見的な歌の発想を持つ石見相聞歌の、「石見のや高角山の木の間より我が振る袖を妹見つらむか」（先掲）などに通じるため、国見的と言うことができる。

だが、これ以外の例は、「見る」の語を伴っていても国見的な歌とは言えず、高所からの詠とも考えられない。たとえば、「ともし火のあかし大門に入らむ日や榜ぎ別れなむ家のあたり見ず」（③二五四・柿本人麻呂）や「をとめ等が放りの髪を木綿の山雲なたなびき家のあたり見む」（⑦一二四四・作者不明）などの場合は「見る」の語を含むものの、前者は船上での詠であり、後者は山と故郷を重ね合わせて、そこに邪魔な存在としての雲がかからないことを願ったものである。作者は山越しに故郷のさまを見ているのであり、高所にはいないと判断される。

以上のことから、当該歌の異伝「妹があたり」に限って言えば、国見的な歌の表現に基づくものと見る余地は十分あるが、「妹があたり」あるいは「家のあたり」という表現を、国見的な歌の慣用語と断定することはできず、その言葉を用いていても、国見的な歌ではない場合の方が多いことが確かめられた。

では本文の「妹が家」はどうであろうか。集中の〈妹が家〉その他へが家〉の用例は全部で二十一例だが、その中で「見る」の語を伴うものは当該歌以外に四例（⑤八四四・⑦一二七一・⑧一五九六・⑭三四四一）ある。中でも、

遠くありて雲居に見ゆる妹が家に早く至らむ歩め黒駒 (⑦一二七一・人麻呂歌集歌)

まとほくのくもるに見ゆるいもがいへにいつかいたらむあゆめあがこま (⑭三四四一・作者不明)

の二首は雲居、つまり高所を見ているが、目的地が高所にあるからといって、作者が今高所にいることにはならないため、国見のとは言えない。

妹が家にさきたる梅のいつも成りなむ時に事は定めむ (③三九八・藤原八束)

外に居て戀ひつつあらずは君が家の池に住むといふ鴨にあらましを (④七二六・大伴坂上郎女)

などの場合は、「家」は単なる場所としての意味合いが強く、主眼にあるのは梅であったり、池の鴨であったりする。また、国見のな歌である以上、詠作者が今いる場所とその故郷、ないし恋人のいる場所とは比較的距離があるはずだが、そういった距離感を感じさせることもない。他の例にも同様の傾向が見出せる。よって「妹が家」その他「〜が家」という表現には国見のな歌の発想は見出せないとと言えるだろう。

ただし国見のな歌であることの否定、すなわち土橋説の否定が、結句を「妹の家」と解釈する直接の理由にはならない。そのため、まだ結句が「天皇の家」である可能性は残っている。

\*

天智天皇は「妹が家も継ぎて見ましを」と希求する。橋本四郎(一九七七)には「上代では、単なる建造物が『屋』、その中にくり広げられる人間関係や生活を含めてというのが『家』と、かなりはつきり区別されている。」とあるので、この家は建物としてのそれではない。

ここで「妹が家も」―せめて妹の家だけでも―ということは、他にも何か見たい対象があり、そちらが本命であろう。

それは他でもない「妹自身」であると思われる。直接の逢瀬は叶わなくとも、家を見ることで相手の暮らしぶりや安否を確認することはできる。「家」を見ることは対面に準ずる行為であると言えるだろう。

そして「継ぎて見」は、青木周平（二〇〇〇）が「時間的に継続する（見る）行為を示し、つきつめると、時間的永遠性を表現する。」と述べるように、永続的に会うことを希求する表現である。集中には多くの用例が見られるが、相聞的内容の場合、見たい、会いたい対象は恋人となる。

外に居て戀ふれば苦し吾妹子をつぎて相見む事計りせよ（④七五六・大伴田村大嬢）

うつつにはあふよしもなしぬばたまのよるのいめにつぎてみえこそ（⑤八〇七・大伴旅人）

現には言絶えにたり夢にだにつぎて見えこそ直にあふまてに（⑩二九五九・作者不明）

たびにいにしきみしもつぎていめにみゆあがかたこひのしげればかも（⑰三九二九・大伴坂上郎女）

「継ぎて見」ることを希求するのは今現在、見ることや逢うことが全くできていない状態のときであり、現実では会うことが叶わないからこそ夢で逢うことを希求する場合もある。当該歌に關しても、妹、すなわち鏡王女に会うことは現実的に無理なのだろう。また「妹が家」を見ることも現状では叶わない。なぜかという大嶋の嶺の向こうに妹の家があり、嶺によって天皇の視界が遮られているからである。天皇は大和にはいない。ただし大和にある大嶋の嶺が見えるところにいる。

集中には「悪木山木末ことごと明日よりは靡きてありこそ妹があたり見む」（⑫三二五五・作者不明）のように「山」が障害となって、その向こうにある妹の家のあたりが見えない状況を嘆き、見えるようになることを願う歌がある。当該歌の場合も状況としては似通っているのだと思うが、解決策として家を移動させるとするのは面白い着想である。



ただ、大嶋の嶺に「家」を置くというやり方は、天智天皇の方策としてはやや回りくどい。すでに即位していたにせよ、まだ皇太子の身分であったにせよ、時の権力者であった天智天皇ならば、妹（鏡王女）をそばに呼び寄せることはたやすかったはずである。何も「家」を高所に置く必要などない。よってこの歌における天智天皇は、本来の自分の立場―為政者としての姿―で詠作してはいないものと推察される。

すでに諸氏が指摘されていることであるが、国見的な歌の概念から離れて、改めて「家」の用例を見てみると、旅、すなわち「異郷」での歌が非常に多い。吉井巖（一九九〇）には『いへ』は旅にあつて、あるいは旅を契機として、本郷の家族―特に妹―を対象して表出される。」とある。

大伴の高師の濱の松が根を枕きぬれど家ししのはゆ（①六六・置始東人）

家であれば筍に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る（②一四二・有間皇子）

ここにして家やもいづち白雲の棚引く山をこえて来にけり（③二八七・石上卿）

からとまり能許のうらなみたぬ日はあれどもいへにこひぬひはなし（④三六七〇・遣新羅使）

異郷にいる作者、すなわち「旅人」から見て、家は「故郷」である。そこには妹や家族の生活空間がある。したがって、家に思いを馳せることは、故郷や妹を思うことに通じる。

当該歌の場合、天智天皇は実際に旅に出ているわけではないだろうが、自分を「旅人」、すなわち異郷にある者と想定して、異郷から故郷の妹を思って詠んだと解することはできないだろうか。天皇は今大和以外の場所において、妹―鏡王女は大和で天皇の訪れを待っている。天皇であれば意のままに訪問できるはずだが、しがたない一旅人の身では自由はきかない。この歌で、天皇が「妹があたり」という漠然とした広い空間ではなく、「妹が家」という限定された場所を見ようとするのは、自分を「旅人」に擬しているからであると考えられる。

そもそも国見的な歌は、「国見歌」に準ずるものであるから、見る範囲はある程度の広さを持った空間であるはずだ。当該歌の「家」のような狭い空間ではありえない。さらにこの歌で天智天皇は、本来の自分とは違う「旅人」の立場をとっている。なおさら「国見歌」からは離れていくだろう。やはり結句は「妹」の家を指すものと理解される。旅人、すなわち「天皇」の家を大嶋の嶺の上に持つてくるのではなく、「妹」の家を移してくるのである。異郷にあつて、現状としては妹の家は見えない。本当は妹自身に会いたいけれど、せめて妹の家を見ることができたら、自分の思慕の情もいくぶん和らぐだろう……。当該歌はこのような内容の歌であろう。

集中には「うつそみの人なる吾や明日よりは二上山を弟世と吾が見む」(②一六五・大伯皇女)や「君があたり見つても居らむ伊駒山雲なたなびき雨はふるとも」(⑫三〇三二・作者不明)のように、「山」を人や故郷を偲ぶよすがとする例がある。また、少数だが「嶺」の用例中にも、

あがおものわすれむしだはくにはふりねにたつくもを見つしのはせ (⑭三五一五・作者不明)

わがゆきのいきづくしかばあしがらのみねはほくもをみとしのはね (⑳四四二一・服部於由)

といった、嶺に立つ雲をよすがとした例や、

あがもてのわすれもしだはつくはねをふりさけみつついもはしぬはね (㉑四三六七・占部小龍)

のように、嶺自体をよすがとした例も見られるため、これを踏まえれば、当該歌の場合は「大嶋の嶺」(注4)と妹の姿が重ねられている可能性もある。それならばなおさら、結句は「妹」の家でないとおかしい。

以上のことから天智天皇の贈答は、「旅に出ている身であるため」直接会うことはできないけれど、せめて妹の家だけでも見たい。大和の大嶋の嶺に妹の家があればよいのに。」と解釈される。異伝は先にも述べたが国見的な歌として理解

することができる。本文歌と異伝の先後関係については諸説あるが、本文歌が、伝承の過程で国見の歌を取り込んで変化していった結果、異伝が発生したと見るのが自然だろう。国見の歌については記紀に例があるため、天智天皇の時代すでに存在していた可能性はあるが、異伝は作者のあずかり知らぬところで形成されていたものと考えられる。

### 三、秋山の樹の下隠り逝く水の「吾」

では鏡王女の返歌、

秋山の樹の下隠り逝く水の吾こそまきめおもほすよりは(②九二)

はどう解釈すべきか。以下、九二番歌について考察を加えていく。

この歌は、「秋山の樹の下隠り逝く水の」という序詞の解釈が重要となる。従来、大別して三つの説があった。一つは「秋山の木の下隠り逝く水」を、水かさが増すことを表わすとし、増加、もしくは優位の「マサメ」を導くとする説<sup>(注5)</sup>。

二つ目が、木の下に隠れて流れ行く水のさまを、表に現われない、ひそやかな我が思いの比喻としたと見る説<sup>(注6)</sup>。最後に、

澤瀉久孝(一九五八)の、

この序は、下の「吾こそ増さめ」といふ「増す」といふ言葉の譬喩として、夏かれの時も過ぎて、秋の深みゆくまに、ゆく水の水量のまさるやうに―といふ風にかかつてゐる事になる。しかしまた「木の下隠り」といふ言葉も、我がひそやかな思ひの譬喩となつてゐる事も認めてよい。但、「木の葉に埋もれて」といふ風にこまかく寫實的に譯しては云ひすぎで、前の歌の「大島の嶺」をうけて、「秋山」の木の下を見えがくれに流れてゆく水を思ひやりつ、序としたと見るべきである。

を初めとする、一と二の折衷案であり、現在はこれが主流となっているようである<sup>(注7)</sup>。

しかし私見としては二を支持する。たとえば新編日本古典文学全集（小学館）の九二番歌の注には、「序からは増加の意で受け、第五句へは数量や程度の比較を表わす意で続く。」とあるが、集中にはこれ以外に、「マス」の意味が一首中で転換したと見られる例がない。「マス」は当該歌以外に七例ある。そして「マサル」の場合も同様であり、「マサル」は全四十例ある。したがって、九二番歌の場合も増加か優位、どちらか一方の意しか表さないと考えられる。そこで「増水」↓「優位のマス」と見る説がまず否定される。

そもそも鏡王女の歌の序詞から、増水のイメージを導くことができない。「増水」の根拠としてよく提示される、

おほきみの まきのまにまに とりもちて つかふるくにの…（中略）…射水河 雪消溢りて 逝く水の いやまし  
にのみ たづがなく…（⑱四一六・大伴家持）

の場合は、「雪消溢りて逝く水の」であり、増水の理由が明確だが、当該歌の場合は「秋山の木の下隠り行く水」から、即座に「増水」を想起することはできない。先行諸説の中には、秋は「時雨」が降るので、増水の意を認めることは可能とするものもある<sup>（注8）</sup>が、集中の「時雨」の用例に「マス」を伴うものはなく、「時雨」からすんなりと「増水」を想起することもできないと思われる。

また、生田周史（一九九一）では、増加の「マス」を「同一性の比較可能と判断された二つのものの外面量的な増加の判定」とし、「奥山の真木の葉凌ぎふる雪のふりはますとも地に落ちめやも」（⑥一〇一〇・橘奈良麻呂）などを例示するが、九二番歌のような「人の恋心」を、雪などの物質と同じように「外面量」と見なして、天皇の思いより自分の思いの方が「増加する」ということも不可能だろう。よってここはやはり「優位」で解釈すべきと判断される。

以上のことから、鏡王女歌の序詞から、「増加のマス」は想起されないこと、この歌の「マス」は優位であることが指摘でき、それと合致しない従来の説（一および三）は否定されるべきだと考える。よってここは、先に挙げた二のように、表にあ

らられないひそやかな私の思いの比喩として、このような序を用いたと考えるべきだろう。つまり序詞は「我」にかかっていくことになる。

さて、鏡王女の思いを、右のように「表にあらわれない、ひそやかな」と解しうるのは、「逝く水」が木の下に隠れているからである。とくに当該歌では「秋山」の木の下に限定される。この「秋山」は天智天皇の贈歌で示された具体的に名―大嶋の嶺―に対応するものであろう。大和にいる鏡王女からもその山は見る事ができる。

集中の「秋山」の用例（全十七例）を見ると、黄葉の語を伴うものと、伴わないものの二つに分類される。前者の例は、  
 ……秋山の 木の葉を見ては 黄葉をば 取りてそしのふ……そこし恨めし 秋山そ吾は（①一六・額田王）

秋山の黄葉を茂み迷ひぬる妹を求めむ山道知らずも（②二〇八・柿本人麻呂）

秋山をゆめ人かくな忘れにしその黄葉の思ほゆらくに（⑩二一八四・作者不明）

など全十一例。一方、後者の例としては、当該歌以外に、

ア．二人行けど去き過ぎ難き秋山を如何にか君が獨り越ゆらむ（②一〇六・大伯皇女）

イ．秋山の したへる妹 なよ竹の とをよる子等は いかさまに おもひ居れか…（中略）…あしたには 失すとい

へ…（②二一七・柿本人麻呂）

ウ．朝露ににほひ始めたる秋山にしぐれなふりそあり渡るがね（⑩二一七九・人麻呂歌集歌）

エ．一年に二遍行かぬ秋山をころに飽かず過ぐしつるかも（⑩二二一八・作者不明、黄葉を詠む）

オ．金山のしたひが下に鳴く鳥の音だに聞かば何か嘆かむ（⑩二二三九・人麻呂歌集歌）

カ．…うちひさす 大宮つかへ…（中略）…春山の しなひ盛えて 秋山の 色なつかしき…（⑬三三三四・作者不明）

以上の六例があるが、この中でア以外は全て、黄葉の語はなくとも、黄葉を連想することができる。例えばイ・ウ・オ・カには「したへる」「にほひ」などの語があり、そこから葉が鮮やかに色付くさまが想起され、エは題詞に「黄葉を詠む」とあることから、黄葉を意識していることは明白である。残るアの「秋山」が表わす情景は、作者である大伯皇女とその弟・大津皇子「二人」だけの共通理解に基づくもの<sup>(注9)</sup>であり、例外的なものと言えるだろう。よって「秋山」と言った場合、基本的にはすぐに「黄葉」が想起されたものと考えてよい。

だが、当該歌の場合には「黄葉」に代わる「黄葉」した状態を表す語（「したへる」など）がないため、鏡王女が確実に黄葉を意識していたとは言えない。ただこの歌を享受した者が、色付いた黄葉に隠れて見えない川の流れをイメージした可能性は十分にあると思われる。いくぶんか九二番歌と発想が通じる、

…まそ鏡 直目にみねば したひ山 下逝く水の 上に出でず 吾がおもふ情 安きそらかも

(9)一七九二・福麻呂歌集歌)

の「逝く水」も黄葉した「したひ山」に隠されている。

そしてこの黄葉に隠されて、鏡王女の思いは見えないのである。青木周平(二〇〇〇)は、集中の「逝く水の」の用例を分析し、「逝く水の」は直下の表現にかかることや、「巻向の痛足の川ゆ往く水の絶ゆる事無く又かへり見む」(7)一一〇〇・人麻呂歌集歌)のように、その直下の表現は「時間の永続性を意味する」ことなどを指摘している。また、

巻向の山邊とよみて往く水のみな沫のごとし世人吾等は(7)一二六九・人麻呂歌集歌)

神なびの山下とよみ去く水にははづ鳴くなり秋と云はむとや(10)二一六二・作者不明)

あしひきの山下とよみ逝く水の時ともなくも戀ひわたるかも(11)二七〇四・作者不明)

しなが鳥いな山とよに行く水の名のみよそりしこもり妻はも

一云 名のみよそりて戀ひつつやあらむ

(①二七〇八・作者不明)

奥山の木葉隠りて行く水の音聞きしより常忘らえず (①二七一・作者不明)

高山の石本たぎち逝く水の音には立てじ戀ひて死ぬとも (①二七一八・作者不明)

神山の山下とよみ逝く水のみをし絶えずは後も吾が妻 (①三〇一四・作者不明)

あさひさし そがひに見ゆる… (中略) …たつきりの おもひすぐさず ゆくみづの おともさやけく よろづよにいひつぎゆかむ かはしたえずは (①四〇〇三・大伴池主)

右に示した例のように、音を轟かせて流れる水を「逝く水」と表現し、その川の音を人の噂や評判の意に転化させて、「ゆるされぬ恋」の嘆きへと心象表現を導く」ものもあるとする。この中で「奥山の木葉隠りて行く水の音聞きしより常忘らえず」(①二七一・作者不明)は当該歌と似た情景を詠んでいるが、青木氏は、二七一一番歌の「音」を導き出すのは聴覚より視覚に依存する面が大きいとし、この歌の存在により、九二番歌の序は「視覚による景を踏まえて解釈すべきであることが理解され」と述べる。「聴覚」に関わる例を見ると、最初の人麻呂歌集歌、最後の大伴池主の歌以外はすべて、卷十から卷十二の作者不明歌であり、作者の範囲がかなり限定的であることが指摘できるので、その点からも当該歌は「聴覚」ではなく「視覚的な水」と捉えることができるだろう。

先にこの歌の「マス」は「優位」の意であることを確認した。では秋山の木に隠されて「見えない」、ひそやかな鏡王女の思いは、どのような点で天皇に勝っていると言えるのだろうか。

寺川眞知夫(一九六九)はこの歌の序詞を「秋山の木の下に隠れて流れてゆくのがおわかりにならない水」と解し、天皇が大嶋の嶺から家(寺川氏は結句を「天皇の家」とする)を見ても、天皇を慕う鏡王女の思いは見えず、分からないた

め、天皇の思いより勝っていると解釈している。橋本四郎（一九七七）はこの歌に「口で愛情を告白しながら逢いに来てくれない相手をなじる気持と、女であるゆえにひたすら待たざるをえない嘆き」を読み取り、また、当該歌には「古代歌謡のかけ合いに見られる挑戦と反撃の姿勢が認められる」と述べる。鏡王女が反撃のきっかけにした言葉は、やはり「継ぎて見ましを」という天皇の願望だろう。

天智天皇は贈歌の中で、会いたいという自分の恋情を素直に吐露している。しかし鏡王女の答歌には直接的な恋情表現はない。一首の大部分は「我」の状態を表す譬喩表現が占めている。「我」の姿もその心も、秋山の黄葉に遮られて、天皇は見る事ができない。妹に直接会うことが叶わないならば、せめて家だけでも絶えず眺めていたいと、異郷にいる天皇は大和の「大嶋の嶺」―秋山に妹の家を移すことを希求するが、そこをいくら眺めたところで、鏡王女の心を知ることのできないのである。この、「見せない」「見えない」思っているところが、「見たい」という天皇の思いよりも優位の点であると考えられる。

よって、鏡王女の答歌は、「秋山の黄葉に隠れて見えないけれども流れていく水のような、ひそやかな我が思いは、あなたにだけ見つけても見ることは出来ません。だから私の思いの方があなたよりもずっと勝っています。」という解釈となる。二首には歌語の共有がなく、一見して発想の類似性も見られないが、

a. 上昇（大嶋の嶺）から下降（秋山の木の下を流れていく水）へという、天皇の視点の切り替え。

b. 天皇が「見たい」もの（＝妹）が「見えない」という切り返し。

という二点において対応関係をなしている。卷二相聞の部で二首が「贈答」として収録されているのは、やはり、編者が表面的な用語の対応だけでなく、内面的な対応関係をも考慮して編纂した結果であろう。



## 四、贈答の場と伝承

天智天皇の歌は第二句と第五句で、類似の表現が繰り返されている。集中には「吾はもや安見兒得たり皆人の得かてにすと云ふ安見兒えたり」(②九五・藤原鎌足)や「白昔の真野の榛原往くき来き君こそ見らめ真野の榛原」(③二八一・黒人妻)など、第二句を第五句でくり返す形が見られるが、この形式は、

・倭方に 行くは誰が夫 隠り処の 下よ延へつつ 行くは誰が夫 (仁徳記・歌謡)

・朝霜の 御木のさ小橋 群臣 い渡らすも 御木のさ小橋 (景行紀・歌謡)

のように記紀歌謡に例が存することから、古代歌謡の名残を残すものと言われている。九一番歌の場合は完全なくり返してはないが、やはり口誦で歌われたものであろう。木簡の発見などにより、記載歌の初発の年代は徐々に早まってきているが、天智天皇代に記載歌が存在した確証はない。今後発見される可能性はゼロではないが、低いだろう。したがって、この歌は本来口誦で詠まれたもので、それが口誦で伝えられ、萬葉集に収録された時点、あるいはそれ以前に「記録」され、以後は記載歌、文字の歌として継承されていったと考えられる。

作者のあずかり知らぬところで発生した、国見的な発想を持つ異伝がどの時点で生じたものか、断定することは難しいが、妹があたり〜家のあたり〜を「見る」という形式の歌は、柿本人麻呂の時代に多く見られ、以降は「あたり」であっても国見ではなくなり、「見る」行為を伴わないものも増えていくので、本文歌の成立からそれほど間を置かずに生じたものではないかと考えられる。萬葉集に収録される前の、口誦の段階から既に異伝が発生していた可能性もあるのではないか。

澤瀉久孝(一九四二)は「妹が家を山の上に移す事は、作者自らを山の上に運ぶ事に較べて詩趣に富んだ想像といふ事は出来る。」と述べ、詩と散文という観点から両者の先後関係を論じている。また鉄野昌弘(一九九五)は「伝承の過程で、『妹

が家』が山の上にあつたら、という本文歌の特異な発想が、『妹があたり』という『国見的望郷歌』の類型に吸収される形で、失われてしまったものと推測」し、更に新谷正雄（一九九五）は「相聞贈答歌において非対称性を考える傾向が薄れてきた時、この異伝が発生したと考えられる」と述べる。それぞれ推察は異なるが、本文歌が先行と見る点は共通しており、本稿もその立場をとる。集中の「妹が家」（「が家」）の用例を見ると、「あたり」とは異なり、萬葉第三期以降の歌人の作が多く、また「家」は故郷ではなく単なる場所としての意味合いが強い。そして先にも述べたが「見る」を伴うものは少ない。そのため、故郷としての「妹が家」を「見たい」と、「天智天皇」が歌うこの歌は、用例の年代的にも表現としても、かなり特異なものといえることができ、異伝の方が目新しさに欠ける。したがって天智天皇以外の第三者が、すでにあつた異伝を利用して本文歌を作り上げた可能性もないとは言えないのだが、鏡王女の答歌に関しては、そのような第三者の介入の可能性は見出せない。天智歌も無理に仮託と見る必要はないだろう。

口誦で歌われた以上は、おそらく天皇と鏡王女は歌の場を共有していたものと考えられる。実際に大嶋の嶺を隔てた両側に二人がいたのであれば、記載歌の状態でなければ贈答できない。使者がいて、口頭で歌を伝えたとするならば、異なる場であっても成立はするが、その場合は歌が残らなかつたのではないか。卷二相聞の部において、天智朝の歌は他に、藤原（中臣）鎌足と鏡王女のやりとり、鎌足の独詠歌、久米禅師と石川郎女の贈答歌、大伴安麻呂と巨勢郎女の贈答歌が収録されているが、この時代これだけしか歌が詠まれなかつたわけではないだろう。残った歌はやはりそれなりに世間に知られた歌であつたと考えられる。

村田右富実（一九九八）は、

この贈答（引用者注・九一、九二番歌）はあくまでも意味上の対応関係が強く、同一の歌いおこしなどといった贈答

の基本的な形式を無視していることになる。表現に対して歌の意味が優越してしまっているといってもよい。表現に意味が優越し、特殊な譬喩歌を含むこの贈答を口誦によるやりとりとみなすことは難しく、少なくとも答歌はその方法において記載歌と考えるべきなのではなからうか。

とし、続く鏡王女と鎌足の贈答歌が「題詞が積極的に作品世界の造形に参画している」ことから、この二組の贈答を「記載歌の方法によるもの」と判断し、記載歌の始まりとされる天武朝以降に作られた仮託歌であると述べている。しかし天智天皇と鏡王女の贈答歌の場合は、題詞が歌に与える影響は少なく、また、鏡王女の答歌は記載歌の状態でなければ理解できないものではない。贈答の基本形式―相手の用いた言葉を利用して返歌する―に該当しないことを仮託の理由付けにすることにも無理があろう。本稿では、歌の解釈は異なるが、二首を口頭による贈答とし、宴席の場で、互いに対面しての掛け合いであると判断している新谷正雄（一九九五）の説に従いたい。二人だけでなく、多数の人間がこの歌を共有したからこそ、伝承され、萬葉集に収録されることとなり、また異伝も発生することになったのだろう。

\*

本稿で考察した天智天皇と鏡王女の贈答歌の後には、次のような歌が収録されている。

内大臣藤原卿娉<sup>二</sup>鏡王女<sup>一</sup>時、鏡王女贈<sup>二</sup>内大臣<sup>一</sup>歌一首

玉匣覆ふを安み開けていなば君が名はあれど吾が名し惜しも（②九三）

内大臣藤原卿報<sup>二</sup>贈鏡王女<sup>一</sup>歌一首

玉匣みもろの山のさな葛さ寐ずは遂にありかつましじ（②九四）

或本歌曰 玉匣三室戸山の

内大臣藤原卿娶<sup>三</sup>采女安見兒<sup>一</sup>時作歌一首

吾はもや安見兒得たり皆人の得難てにすと云ふ安見兒えたり(②九五)

九一番歌から通して見ると、天智天皇―鏡王女―藤原(中臣)鎌足―安見兒という恋の連鎖が見出せる。卷一に収録された、

天皇遊<sup>二</sup>獨蒲生野<sup>一</sup>時額田王作歌

あかねさすむらさき野逝き標野行き野守は見ずや君が袖ふる(①二〇)

皇太子答御歌 明日香宮御宇天皇諡曰<sup>二</sup>天武天皇<sup>一</sup>

紫草のにはへる妹をにくくあらば人孀故に吾戀ひめやも(①二一)

や、卷四相聞の部所収<sup>(注10)</sup>の、

額田王思<sup>二</sup>近江天皇<sup>一</sup>作歌一首

君待つと吾が戀ひ居れば我が屋戸の簾動かし秋の風吹く(④四八八)

鏡王女作歌一首

風をだに戀ふるはともし風をだに來むとし待たば何か嘆かむ(④四八九)

なども含めると、天武天皇(大海人皇子)や額田王も加わり、連鎖は更に広がっていく。現代の我々だからそう見える、ということではないだろう。卷二相聞の部の編者は、萬葉集の享受者たちがそのような恋の連鎖を読み取ることを期待して、配列したのだと思われる。

奈良朝以前の、初期の萬葉歌<sup>(注11)</sup>が収録された卷二相聞の部は、従来「物語的配列」<sup>(注12)</sup>との指摘があり、作者以外

の第三者が介入した痕跡が色濃く認められる。例えば、藤原宮御宇天皇代に収録された、

大津皇子竊下<sup>二</sup>於伊勢神宮<sup>一</sup> 上來時大伯皇女御作歌<sup>二</sup>首

吾がせこを倭へ遣るとき夜ふけて鶏鳴露に吾が立ち霑れし (②一〇五)

二人行けど去き過ぎ過ぎ難き秋山を如何にか君が獨り越ゆらむ (②一〇六)

大津皇子贈<sup>二</sup>石川郎女<sup>一</sup>御歌一首

あしひきの山のしづくに妹待つと吾立ち沾れぬ山のしづくに (②一〇七)

石川郎女奉<sup>レ</sup>和歌一首

吾を待つと君が沾れけむあしひきの山のしづくに成らましもを (②一〇八)

大津皇子竊婚<sup>二</sup>石川女郎<sup>一</sup> 時津守連通占<sup>二</sup>露其事<sup>一</sup> 皇子御作歌一首 未<sup>レ</sup>詳

大船の津守が占に告らむとはまさしに知りて我が二人宿し (②一〇九)

日並皇子尊贈<sup>二</sup>賜石川女郎<sup>一</sup>御歌一首 女郎字曰<sup>二</sup>大名兒<sup>一</sup>也

大名兒を彼方野邊に苅る草の束の間も吾忘れめや (②一一〇)

以上六首の歌群などは、標題と作者の年代との間にずれが生じている。『日本書紀』持統天皇(称制前紀)によると、天武天皇が朱鳥元(六八六)年九月九日に崩御し、およそひと月後の十月二日に大津皇子の謀反が発覚。皇子は逮捕され、翌三日に詔語田の家で賜死している。また、同年十一月には大伯皇女が伊勢齋宮の任を解かれ、帰京している。したがって一一〇以外の五首は、「藤原宮御宇天皇代」のものではなく、正しくは「明日香清御原宮御宇天皇代」(天武天皇代)に収録されるべきものである。しかしこれは編者が認識を誤っていたわけではなく、意図的に六首をまとめて、同一の標題下に置いたと考えられる。六首を一連のものとして見ると、

・ 大津皇子は謀反事件の前に伊勢神宮の姉のもとを訪れ、我が身の無事を祈っていた。(一〇五・一〇六)

・ 大津皇子は石川郎女という女性と関係があった。(一〇七・一〇八)

・ 津守連通の占いで石川女郎との関係が露見したが、大津皇子は開き直った。(一〇九)

・ 草壁皇子も石川女郎に思いを寄せていた。(一一〇)

という展開が浮かんできて、謀反事件の背景に、大津皇子と草壁皇子との石川女郎(女郎)をめぐる対立があったのではないか、と思えてくる。編者はそれを狙ったのだろう。これと同じような配列意図が、鏡王女にまつわる歌群にも認められる。ただし、天智天皇と鏡王女の贈答歌に関しては、歌自体に第三者の介入を認める必然性はなく、歌の成立後に伝承が始まったと見てよい。

二首は歌語の共有がなく、一見して発想の類似も見られないが、表現において、たしかに対応関係をなしていた。鏡王女は天智天皇の贈歌をうまく利用し、切り返して、自分の恋情の深さを伝えている。天皇の表現は他に例を見ない、個人的なものであるが、思っただけでなく歌のレベルも、鏡王女が一段上と言えそうである。

この贈答は、記録に残る、萬葉相聞歌の初発の例となるので、他の歌についても今後考察を深め、初期の萬葉相聞歌のありようを捉えていきたい。

## 付記

『萬葉集』の用例を引用する場合、『補訂版萬葉集本文篇』(塙書房)を底本とし、正訓字の場合は漢字で、それ以外は平仮名で表記する形をとった。『古事記』、『日本書紀』の引用は『新編日本古典文学全集』(小学館)に拠る。

注

- (1) 鏡王女の出自について、本居宣長『玉かつま』（日本思想大系40『本居宣長』岩波書店、一九七八）は「二女王、ともに鏡王といひし人の女にて、鏡女王は姉、額田王は弟と聞えたり」と述べる。また、中島光風「鏡王女について」（『文学』十一卷十号、一九四三）は、延喜式諸陵寮の記載を根拠として、舒明天皇と鏡王女の関係性の高さを指摘し、舒明天皇の皇女もしくは皇孫ではないかとする。中島氏の説によるならば、天智天皇も舒明天皇の皇子であり、二人はかなり近い血縁関係となる。
- (2) 澤瀉久孝『大島嶺』攷（『萬葉古径』三、中公文庫所収、一九五九）では『日本後紀』に見える於保志萬と同所て平群群付近にあると推察されることなどから、「暗峠から南へ十三峠を経て高安山及び信貴山、その西南につづく信貴山と同高の一峯に至るまでの間のいづれかであらう。」と比定されている。
- (3) 集中の国見歌の例としては、「やまとははむら山あれどとりよろふ天の香具山のぼり立ち 国見をすれば 國原は煙立ちたつ 海原は かまめ立ちたつ うまし國そ 蜻嶋 やまとの國は」(①二・舒明天皇) などがある。国見は天皇などの為政者が、高所から自分の所有する土地を見はるかす、公的な行事である。
- (4) 青木周平「天智天皇と鏡王女の歌」(二〇〇〇)や、小田芳寿「贈答歌への一視点―天智天皇と鏡王女の贈答歌をめぐる―」(『論究日本文学』七十九号、二〇〇三)では、「やまとなる大嶋の嶺」そのものが讚美すべき対象であるとされている。
- (5) たとえば『萬葉考』は「秋は水の下れば、山下水の増るに譬て、吾恋奉ることこそ、君より増たれといへり」と述べる。
- (6) 「落葉の下を潜つて、外にあらはれずに流れて行く水に、我が忍戀の心を譬へたのは面白い」(鴻巣盛広『萬葉集全釋』、廣文堂書店、一九三〇) などがある。
- (7) この他、高橋典子「序詞としての『秋山の樹の下隠り行く水の』」(『萬葉語文研究』第2集、和泉書院所収、二〇〇六)は「当

該九二番歌において、序詞は『ます』と『吾』の二つの接続を示し、それは整理されていれば連用あるいは連体関係という構文を持ち得たこと、しかしそれは実際には歌のことばの中で十分には組織されていないということを見た」と述べ、両案併記の形をとっている。

(8) 土屋文明『萬葉集私注』一(筑摩書房新訂版、一九七六)の「恐らく初秋霖雨期の實際が、作者の心裡に印象されて居るのであらう」などが挙げられる。

(9) 橋本達雄「二人行けど行き過ぎ難き秋山―大伯皇女の歌一首の発想―」(『専修国文』四十四号、一九八九)などによると、この歌の背後には、大津皇子の謀反事件があり、一首は仁徳紀の「梯立の嶮しき山も我妹子と二人越ゆれば安席かも」(『牟婁皇子』)を意識したものと考えられている。

(10) 卷八・二六〇六、二六〇七に重出している。

(11) 萬葉集の歌は時代の流れに沿って四分割され、第一期と第二期は壬申の乱を境としている。そしてこの第一期のことを一般的に「初期萬葉」と称する。しかし、全ての論者がこの区分にしたがっているわけではなく、揺らぎがある。筆者は卷二相聞の部を考察対象としているため、壬申の乱以降の天武朝、藤原朝も「初期萬葉」の範疇に含めている。

(12) 伊藤博「卷二磐姫皇后歌の場合」(『万葉集の構造と成立』上、塙書房、一九七四)や、中西進「感愛の誕生―万葉集卷二の形成―」(『万葉論集第六感』万葉集形成の研究 万葉の世界』講談社、一九九五、初出一九六六)などで指摘されている。本稿で言及した、大津皇子にまつわる歌群など、特に物語性が顕著な歌については、伊藤・中西氏以外の論も多い。

## 参考文献

・青木 周平(二〇〇〇)「天智天皇と鏡皇女の歌」(『古代文学の歌と説話』若草書房所収、初出一九八七)



- ・生田 周史（二九九二）『萬葉集新考』の「訛」説―「マサル」考―優位・増加の「マス」「マサル」を巡って―  
（『日本古典の眺望』桜楓社）
- ・伊藤 博（二九九七）『萬葉集釋注』六（集英社）
- ・澤瀉 久孝（二九四二）『家もあらましを』と『家居らましを』  
（『萬葉古径』一、中公文庫所収）
- ・澤瀉 久孝（二九五八）『萬葉集注釋』卷第二（中央公論社）
- ・新谷 正雄（二九九五）『天智天皇と鏡皇女の贈答歌について』  
（『美夫君志』第五十一号）
- ・土橋 寛（二九五八）『国見歌の万葉における展開―行幸従駕と羈旅の作をめぐって―』  
（『国語国文』二十七卷十号）
- ・土橋 寛（二九六〇）『萬葉解釋におけるアキレスの踵』  
（後『萬葉集の文学と歴史』塙書房所収、一九八八）
- ・鉄野 昌弘（二九九五）『天智天皇と鏡皇女の贈答歌について』  
（『東京女子大学日本文学』八十四号）
- ・寺川眞知夫（二九六九）『秋山の木の下隠り逝く水』  
（『解釈』二十二卷二号）
- ・橋本 四郎（二九七七）『卷二の贈答歌』  
（『万葉集を学ぶ』第二集、有斐閣所収）
- ・村田右富実（二九九八）『鏡皇女をめぐる相聞』  
（『大谷女子大國文』二十八号）
- ・山田 孝雄（二九四二）『萬葉集講義』卷第二（宝文館）
- ・吉井 巖（二九九〇）『いへ・やど・やね』  
（『萬葉集への視角』和泉書院所収、初出一九八〇）